

共同研究 ● 人類の移動誌：進化的視点から (2008-2011)

人類はアフリカ大陸で誕生した後、数10万年をかけてユーラシア、アジア、南北アメリカ、そしてオセアニアへと移動して居住生活を送ってきた。これほど広く地球上に拡散した動物はおらず、人類が「ホモ・モビリタス」とも呼ばれる所以である。現代社会においても、人類は世界各地で様々な方法や目的で移動を続けている。

このような人類集団の「移動」に着目し、その歴史や移動に伴う文化的現象を人類学的視点から多角的に解き明かすため、2008年後半から3年半の予定で共同研究会「人類の移動誌：進化的視点から」を立ち上げた。

人類史に関しては、これまで自然人類学や考古学、人類遺伝学などの研究が多くなされてきた。この共同研究では、さらに認知考古学、文化人類学、言語学といった諸分野の研究者の参加を得ることによって、分野横断的な視点から「人類の移動誌」とも呼べるものを構築し、人類移動モデルの提唱も行いたいと考えている。

人類はアフリカに誕生したあと、数回にわたってアフリカからユーラシア大陸へと移動した。しかし、現在のように地球の広い範囲に拡散移動したのはホモ・サピエンスの登場以降のことである。現代に生きる人類の起源を遺伝学的に研究すると、20万年前ごろにアフリカにいた人類集団の一つにその起源をたどれる。ミトコンドリア・イブ説である。そして、このホモ・サピエンスが全地球的な拡散をはじめたのは、今から5万年前頃であった。

このような全地球的な人類の移動を追ったプロジェクトとしては、「先史モンゴロイドの拡散と適応戦略」(文部省(現文科省)科学研究費重点領域研究)が1989年～1992年に行われた。これは、本共同研究メンバーの赤澤威(現高

知工科大学)が中心となり、考古学、形質人類学、遺伝学、古地理学、古生態学などの分野にかかわる100人もの研究者が参加して行われ、筆者も参加した。当時の最新の研究成果が持ち寄られ、アジア、オセアニア、アメリカなどへの人類の拡散の歴史シナリオが描かれ、多数の書籍が成果として出版された(『モンゴロイドの地球』全5巻(東京大学出版会、1995)、『モンゴロイドの道』(朝日新聞社、1995)他)。

それから20年がたち、近年の発掘調査の増加や分析手法の発展、そして特に、遺伝学分野での研究の進展がめざましく、新たな資料の蓄積を使って拡散シナリオを再度描く必要が出てきている。たとえば、オーストラリアへの人類の拡散が、当時は6万年を越える古い年代が考えられていたので、アフリカを出たのは更に古い可能性が考えられていた。ところが、その後、さらに12万年前にまで古くさかのぼったオーストラリアの最古の年代値に疑問が呈され、現在では5万年前頃に人類が移動した可能性がもっとも広く受け入れられている。これによって、人類のアフリカ大陸からの拡散、アジア大陸から更に南北アメリカ大陸、そしてオセアニアへと移動した時期や経路に関するシナリオを再度、描く必要が生じている。

他方、人類集団が移動した際には、新しく遭遇した自然環境に対する生物学的・文化的適応が多様な形で行われた。これについては多くの先行研究が蓄積されており、人間居住がひきおこした様々な自然破壊なども明らかにされてきている。たとえば、オセアニアのように周囲を海に囲まれた島嶼環境においては、環境破壊がそこに暮らす動物、ひいては人間居住に与える影響は計り知れない。人間が移動・移住をしたことにより、それまでその島に生息していた鳥

の90%までもが、数100年以内に絶滅したりその島には見られなくなった例が多く、島の報告されている。

また、人間集団が移動すれば、先住の人間集団との接触が生じる。ネアンデルタールが現生人類であるクロマニオンと同時代に共存していたことがわかって以降、両者が無関係に生存していたのか、あるいは何らかの接触をもっていた可能性があるのかなどが魅力的な研究トピックの一つになっている。

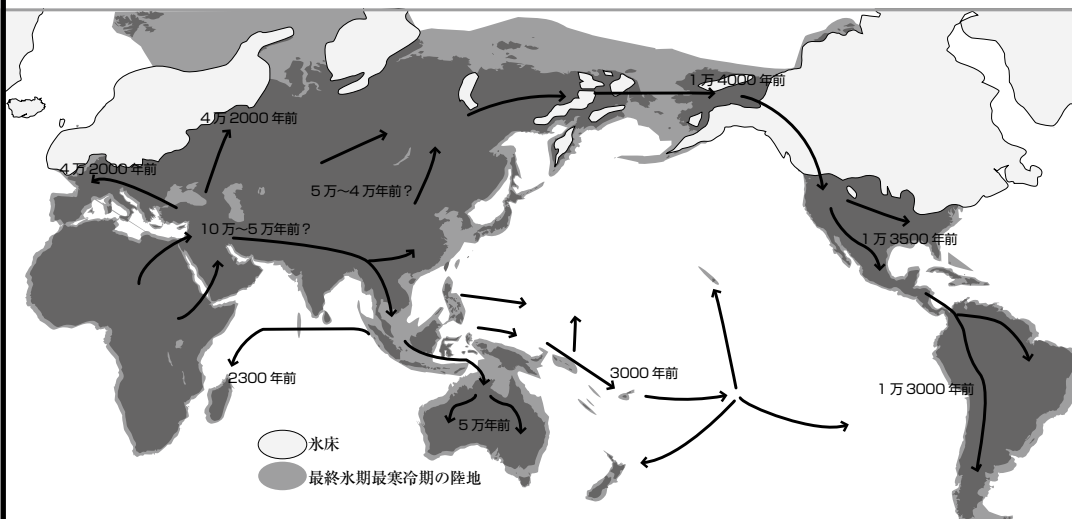


図1 人類の拡散ルート (海部陽介『人類がたどってきた道』NHK ブックス 2005より)。

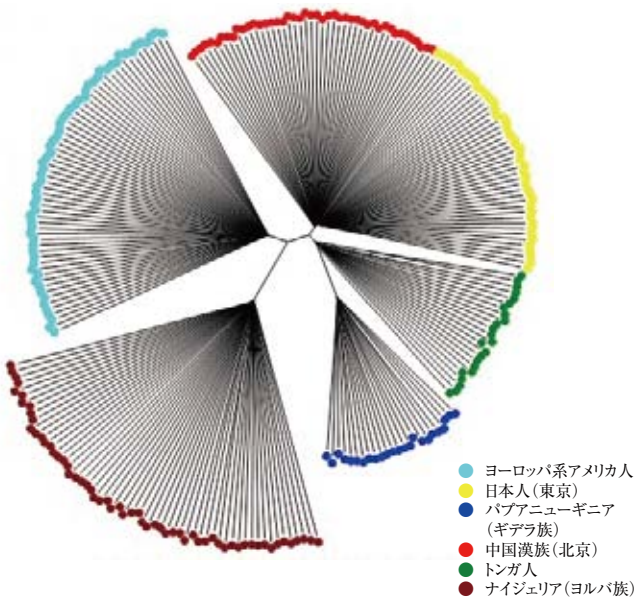


図2 ゲノムワイド多型解析からみた集団間の近縁関係 (提供:木村亮介)。

この研究会では、文化段階の異なる人間集団が出会った時にどのような接触があったのかを、世界の諸地域での事例を研究することで、ネアンデルタールと現生人類との出会いがどのようなものであったのかを考えるヒントにできないかも模索する。

従来、先史人類集団の移動を研究してきた理系(古人類学、考古学、遺伝学など)の研究者たちは、主として移動時期や移動ルート、起源地の問題などに関心をもち、人類の形質・形態や遺伝情報などに基づいて研究してきた。それに対して文系の研究者は、「人類の移動」を過去から現代にも共通する課題としてとらえ、移動によって生じる文化接触、文化変化、文化適応などを中心とする文化事象を研究してきた。

文系と理系の分野横断的な研究を最大の特徴とする本研究会では、それぞれの研究分野における研究の蓄積や最新の情報を報告して総合的、多面的に共同討議を行い、従来の研究成果を異なる視点から見直し、新たな人類移動に伴う文化変容に関するモデル構築へと結びつけることを目的とする。

以上のようなバックグラウンドをもって立ち上げた本共同研究会であるが、2008年および2009年には、以下の発表が行われた。

人類の移動を追う

- 「人類の移動誌を旧人と新人の交替劇に視る」(赤澤威)
- 「アジアにおける原人の移動誌解明へ向けて:初期原人からホモ・フロレシエンシスまで」(海部陽介)
- 「海域世界への移動:拡散と出会い」(印東道子)
- 「ヒトゲノム全域の多様性解析の現状と展望」(徳永勝士)
- 「ゲノムデータからみる人類の移動と適応」(木村亮介)

人間集団の移動の特徴

- 「モンゴル遊牧民の移動」(小長谷有紀)
- 「物質文化からみた台湾先住諸民族のユーラシア東部におけ

る位置づけ」(野林厚志)

- 「オーストロネシアンに取り残された人々:パプアニューギニア・内陸部と沿岸部の人々の生活」(須田一弘)

これらの発表は、人類がアフリカから大地溝帯を北上し、アラビア半島の北と南を通ってヨーロッパとアジア、そしてオセアニアへと拡散し、1万年前までには五大陸全てに広がったことを示しており(図1)、その背景には、文化・技術的な適応能力があったことなどが指摘された。とくに、旧石器文化段階でも、海を越えてニューギニアやオーストラリアへ移動していたことは、十分な渡海能力を備えていたことを示唆しており、日本列島への旧石器集団の移動を考える際にも参考になるだろう。他方で、ヨーロッパではホモ・サピエンスと旧人(ネアンデルタール)が同時期に共存していたのに、なぜ旧人は絶滅し、新人が生き残ったのかについて、赤澤は、脳容量の違いがその交代劇の背景にあった可能性に着目している。

最近もっとも注目を浴びて世界各国で競って成果を上げているのが、分子生物学の分野である。ヒトゲノム全域の配列を決定する研究が進んだことに基づき、さらに人類集団の類縁関係を探る遺伝マーカーを探る研究が活発に進められている。

徳永勝士(東京大学)からは、ヒトゲノム全域の多様性解析の最先端の結果が紹介された。タンパクの遺伝的多型、ミトコンドリアDNAの多型、HLA遺伝子群の多型などを見てゆくと、日本列島の集団形成の様子、個人レベルでのゲノムデータを利用して集団の系統樹などが描けるといふ。つまり、言語学や考古学の独壇場だった人類の移動史研究において、ヒトゲノムデータが有力な情報を提供するということだ。さらに木村亮介(琉球大学)らによる研究では、ゲノム中の50万個の多型部位の遺伝子型を決定して個人レベルのデータが比較され、同一人類集団の個体がみごとにクラスターを形成し、集団毎に分かれることが示された(図2)。ミトコンドリアDNAに比べ、多数の遺伝子領域を総合的に解析することで、過去の人口や移住の推定、個人の帰属集団の推定、自然選択が働いた遺伝子の探索などが行われることが期待される。

本共同研究プロジェクトの内容は、ホームページを立ち上げて発信する予定で、丸川雄三(国立情報学研究所)が現在デザインを行っている。各研究者の発表内容を視覚的に理解できるような工夫をし、人類の地球規模の移動を可視化できるようなものになることを期待していて欲しい。

いんとう みちこ

民族社会研究部教授。オセアニア先史学、民族考古学が専門。ミクロネシアのフェイス島で継続的に発掘調査を行っている。天然資源に制約のあるサンゴ島に暮らす人々の居住史および生存戦略を、考古学的手法を用いて研究している。編著書に『オセアニア 暮らしの考古学』(朝日新聞社 2002年)、『オセアニア学』(共編著 京都大学学術出版会 2009年)など。